28P2-am001

培養ラット胎児発育へのセントジョーンズワート(STW)とシンバスタチン(RIP)の併用効果

○横山　篤[1,3], 秋田　正治[2], Robert　Ross[3], 李　明宝[4], Sudanu　Torumakori[5]([1]神奈川生命科学研究所, [2]鎌倉女子大学, [3]ボルチモア大学, [4]四川第二医大, [5]マレーシア科学研究所)

【目的】近年先進国において、健康食品の発展に伴い医師から処方される医薬品との飲み合わせや、新薬プロミネントのような医薬品同士の合剤が流行りであり、且つ問題も生じている。私の経営する医療法人でも１週間（外来営業日 6 日間）で外来において出る処方せんの内、一剤処方は 333 例に対して複合処方は 1467 例（１：４）であった。これらの結果は、薬漬けの影響か、薬好きの患者の希望によるものかは不明である。複合処方の場合は妊娠動物への試験はきわめて困難である。そこで、簡易的にこれらの複合処方（飲み合わせも含む）の胎児への影響を観察できる胎児培養法を用いてその影響を観たので報告する。【方法】妊娠１１日目のラット胎児を体外に取り出し、４８時間培養を行った。STW 及び RIP はいずれも単剤投与試験時の最高用量 500 μg/ml を試験に供した。対照群４５例、STW 単独群４５例、RIP 単独群４５例、STW＋RIP 群５０例の培養ラット胎児を用いる巨大なスケールで実験した。【結果】培養時間 2,4,12,24,36,48 時点での胎児の心臓の拍動数、胎児の身長、胎児総蛋白量、総体節数、外表形態のいずれの項目において全群で異常は認められなかった。ただ、RIP 単独群で培養１２時間での胎児の心拍動に微弱なノイズが入り２時間の間、不整脈が生じた。【考察】健康食品はダイエットに関連するものが多く、ダイエットする人は大抵肥満傾向でコレステロールが高いため RIP を常用する場合が多いと考えられる。この方法は培養液中の各薬物の濃度を調節しやすく有効であった。